

冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和五年一月二十八日(土曜日) 午後二時三十分開演

狂言 苞山伏(つとやまぶし)

苞は弁当の包みのことです。持ち主の山人はこれを枕元に置いて山中で昼寝をしています。朝の早い仕事で眠いのです。長旅でくたびれた山伏も近くで横になりました。そこへ山を越えて使いに行く男が通りかかり、この男も主人に酷使されて面白くない様子です。出来心で弁当に手をつけてしまいました。山人が目覚まして犯人の詮索が始まりますが、疑われた山伏が、狂言の山伏には珍しく、言うことに理が通り、真犯人を見事に祈り出します。

能 龍田(たつた)

秋も暮れ過ぎた霜降月のある日、奈良から河内の国へ向かう経聖の一行(ワキ・ワキツレ)が龍田川を渡ろうとすると、「川に散り浮く紅葉の錦を渡ることと裁ち切れば神と人の仲も絶えましよう。それは薄氷が張る冬の川でも同じことです」と言って行く手をさえぎる女(前シテ)がいます。女は巫女を名乗り聖を龍田明神に案内します。冬枯れの社頭の本立の中に色鮮やかな盛りの紅葉が一本あって、これを神木と聞いた聖は紅葉を幣として神前に手向けます。宮巡りをするうちに巫女は龍田姫を名乗り、光を放ち紅の袖を披いて社壇に入ります(中入)。所の者(アイ)から龍田明神の由緒を聞いた聖は神前に通夜して神告を待つことにします。やがて神官の打つ鼓の音と共に御殿が鳴動し、光まばゆい御神体(後シテ)が現れました。国を守り民を豊かにする龍田の神は、代々の歌人に紅葉を詠まれてきたことを思い、夜神楽に時を忘れて紅葉を幣、時雨を鈴、波を白木綿とする祝詞をあげた後、昇天します。(西村 聡)

前シテ (巫女) 面(泣増) 鬘 鬘帯 箔 唐織 扇

後シテ (龍田姫) 面(前シテと同じ) 黒垂 天冠 箔 色大口 腰帯 長絹 (又は舞衣)